

第3回 第4次清瀬市民地域福祉活動計画策定委員会概要

《会議概略》

日時 令和3年12月6日（月）10時～11時45分

場所 コミュニティプラザ 会議室1

出席 赤川都 石崎勇仁 岩崎雅美 小滝一幸 後藤清 高橋紘之 土屋テル子
長嶋潤 林清 菱沼幹男 増田恵美子 山村康一

欠席 伊藤淳一 齋藤靖之 麦倉稔

事務局 山下晃 大熊静子 星野孝彦 奥山裕司 関口美智子 富田千秋 小林浩子
増田尚美

1. 開会

社会福祉協議会事務局長より

2. あいさつ

社会福祉協議会会長より

3. 第2回策定委員会議事録について

★ 資料1に基づき、事務局より説明

確定とし、委員名は伏せ、ホームページにて公開する。

4. 福祉のまちづくりアンケート調査報告について

★ 資料2・3に基づき、事務局より説明

委員長 アンケート調査の概要について報告があった。気になることやご意見等があればいただきたい。

委員 携帯電話やインターネット操作関係に困るという声は高齢者だろう。買い物に関する声はインターネットができそうな若い層にもみられていたが、どのような声があったのか。

事務局 小さい子どもを連れての買い物が大変という声の他、障害のある方のご家族からの声もあった。

委員 地域でのたすけあいの仕組みについて検討しているが、高齢者以外の方が買い物に困るという状況は見えていなかった。

委員長 高齢者だけでなく幅広い世代で買い物に困る状況が見えたところかと思う。地域の方と協議する中で、ぜひ参考にさせていただきたい。

委員 小学生の意見は貴重な声が多かった。落書きや犬の糞など地域の問題提起も

あった。登校が面倒くさいと感じているのは、引きこもり予備軍なのか、人間関係が影響しているのか、コロナ休校による影響なのか詳細を見ていく必要があるのではないか。

千代田区では小テストの活用など日々の学習の中で学びを深める取り組みをしているが、子どもたちの声を聴きながら教育をすすめている。

調査結果において改善が必要な点もみられた。12頁の「ふれんどサービス利用について相談したことがあるが断られたため、依頼不信になっている」という声は窓口対応の改善につなげる必要がある声であり、33頁の「守られているようで守られていない個人情報の取扱い方」という声についても、検討する必要があるだろう。35頁の「役所は電話はつながらない」というのは、行政窓口の改善につながるとよいし、57頁の福祉サービスの事業者間での利益誘導については、事業所連絡会や地域包括支援センター運営協議会の中で協議いただくとよいのではないか。

この活動計画の中で触れなければならない点について触れたい。まず広報に関して、市報の全戸配布を望む声は市につなぐとともに、買い物困難な方に既存の買い物支援の情報周知も大事だろう。また、小中学校区単位で、大人の学校のようなスマホ操作など学べる場があるとよい。62頁の「一家心中寸前」という声や、精神疾患が疑われる方の声など、緊急時の対応を求める声もある。社会福祉協議会に地域福祉コーディネーター配置があれば、保健師につなぐだけでなく、相談者にきちんと向き合った支援に取り組んでいくことができるのではないか。

委員長 大事なところの意見をいただいた。市報は全戸配布となっているが、そこから漏れている人がいるということが見えてきている。社協、地域、行政、社会福祉法人など、それぞれがどう取り組んでいくかという作業がこれから大事になっていく。声を大事にした活動計画になるとよい。
次の議事に移りたい。

5. 作業委員会報告について

★ 資料4・5に基づき、事務局より説明

委員長 包括的な支援を担う専門職の連携の委員会では、地域福祉コーディネーターの必要性、多職種多機関連携のあり方、その仕組みをどうするかという点が出されていた。小地域での福祉推進組織づくりの委員会では、自治会が活発なところは自治会が一つの基盤となりうるなど小地域の在り方は多様であってよいが、その中でもどういう仕組みであればより力を発揮できるのか、この計画の中にどのように明記していくか、この委員会で考えていくところとなる。
参加された委員より、一言ずついただきたい。

- 委員 相談支援機関の専門職は、相談を回すだけで手いっぱいになっており、課題は見えていても、どう解決していくのか、受け皿を作っていくのかまで手が届かないという状況が見えた。目の前にいる困っている人に対して、切迫感をもって、受け皿づくり等に取り組み切れていないのではないかと感じた。自分の部署で解決できないのであれば、広くまわりに投げかけていくこともできるのではないか。
- 委員 教育委員会の方が、就学期の外国人の子どもについての課題も提起していた。東久留米市では、就学前後の子どもへの対応について、日本語教室スタッフと民生委員と教育委員会が一緒になって対応している。清瀬市は担当部署がない中で、どう取り組むか課題だと考えた。
- 委員 小地域での福祉推進組織づくりの委員会に参加した。隣近所との普段からの付き合いがないと誘いにくいだが、興味があうと会話するようになる。どう人を巻き込みながら地域づくりを進めていくのかが課題だろう。「わがまち」の意識づくりというフレーズはとても響いた。
- 委員 小地域での福祉推進組織づくりにも参加した。参加者の固定化という悩みも出されていたが、若い世代の巻き込みが課題ではないか。例えば、退職後に何かしようと思ったとき、地域に関わる方法がわからない人もいないか。みんなが、ここで生き、よりよく死んでいくためにどうしたらよいか、わがまちの意識をつくり、さらには困っているところをどう支えていくのかというところに手を伸ばさないと、小地域での支えあいにはならないだろうと強く感じた。
- 委員 自治会連合会の活動において、代表が病気で倒れた時、銀行に連れて行って、口座解約手続きをしなければならぬという事態となった。役員が高齢化するところのようなことも起こりうる。「近くの他人になろう」というスローガンのもと、高齢者以外にも幅広い人を巻き込んでいくことができるだろうか。
- 副委員長 「東京モデル」を東京都社会福祉協議会より提示いただいたが、清瀬ではどのようなモデルが考えられるだろうか。資料4、5に書かれてあるところに集約される。アセスメントを共有化して、専門職で連携していくのは大変困難な道ではないかとも考え、結論として地域福祉コーディネーターが汗をかいていくのが一番よいのではとの考えに至った。いろいろな人を巻き込んで、調整していくのは大変だろうが、そこを担ってほしい。
- 委員 教育委員会より参加があったことはとても大きなこと。
- 委員 小地域での福祉推進組織づくりについて、府中市の取り組みをそのまま清瀬に取りこむことは難しい。ただ、熱い思いで集まっている人たちは、価値観や思いで必ずぶつかる、都度話し合い、やり方を変え、規約を変え進んできていたというところに学びを得た。
- 委員 地域福祉コーディネーターは、相談窓口がない、誰に相談してよいかわからないという声に対して、住民の方と一緒に声を受け止め、つないでいく役割

を担う。地域だけで支えることが難しいところは専門職にもつないでいく。府中市で各地域での組織づくりの側面支援を行っていたのは、地域福祉コーディネーターだった。その点も参考にできるのではないかな。

委員 地域福祉コーディネーターという専門職がいて、情報共有、組織横断できる人がいるとよいと感じた。実際に他地域の避難所運営協議会に参加しているが、他の地域ともつながっていけるとよいと考えている。また、継続的なおまつりは、地域や人をつなげる役割も期待できる。ただ、自分自身の中ではまだビジョンがうまく描けていない。いろいろな話を聞く機会でも、学んでいきたい。

委員 他の円卓会議や地域づくりの会の方と話す機会はあまりなかったので、貴重な時間だった。組織の課題はいろいろあるのだと再認識したのと同時に、最初の第一歩は顔見知りになることだと感じた。円卓会議や地域づくりの会が参加しやすい場をつくり、顔見知りを増やし、少しずつ人を巻き込んでいくことができるのではないだろうか。その土台をつくって、その先に課題解決に向けて進んでいけるようになるのではないかな。そのような力をつけていく組織づくりができるとういのではないかな。

委員長 ビジョンをつくるという意見があったが、計画策定の大事なところとなる。地域福祉コーディネーターがどういう役割を果たしていくのが大事なのか、この活動計画の中でしっかりと明記できるとよい。また、地域づくりの会を今後どうしていくのか、円卓会議や協議体などの関係性の整理も含め、この計画の中で考えていきたい。

6. ニーズ把握から見えてきたことと基本目標の設定に向けて

★ 資料6に基づき、事務局より説明

委員長 まとめた7つは大事な視点。この7つに対する基本的な考え方を示していくことが必要となる。前の活動計画の理念は「支えあいの手をつなぎみんなでつくろう地域の輪—孤立のない地域をめざして—」と大きなものとなっている。7つの一つ一つに対して、地域の人と社協が取り組む基本理念として示していくことが大事ではないか。1つ目は枠に縛られない相談支援に取り組む、2つ目は情報弱者をなくす、3つ目は小地域の活動を進める、4つ目は人と人のつながる場をつくる、5つ目は相談できない人の声を大事にする、6つ目は生きづらさを抱えた人の理解を進める、7つ目は尊厳ある生活を支えたと考えられる。

皆さんからご意見をいただきたい。

委員 これまでの4つの基本目標、と今回示した7つは。おまつりは住民を巻き込

む力がある、顔見知りを増やすという意見もあったが、次の世代につながる視点としてもみることはできるのではないか。若い子育て世代が入るためにも、子どもというところが大事。

委員 コロナの捉え方について、市民と福祉現場の温度差はあるかもしれない。地域の方に施設を活用してほしいという気持ちはある一方、万が一コロナが入り込んでしまったらどうするのかということも考える。まだコロナ禍は続くとして、それを踏まえた計画を考える必要があるのではないか。

委員長 日本社会事業大学などの市内3大学を巻き込んで地域づくりができるとうい。コロナ禍におけるつながり方を考えていくことも大事で、オンラインに関しては学生が関わる場所にもなるかもしれない。学生は点と点でつながっているが、地域づくりの会などが受け皿になれるとうい。

委員 この委員会にきて、知らなかった情報を知ることもあった。一般市民の方は、地域福祉コーディネーターという言葉は知らないだろう。ボランティアや地域活動団体も知らない資源もある。SOSを受け止めていくには、情報共有の仕方が課題と考えた。

委員長 情報が必要な方に届く仕組み、相談しやすい人がいるというところもある。今回外国人の問題も見えてきたのは大事なところ。

副委員長 7つかどうか今一度考えたい。やりたい人の視点ではなく、何に困っていて、何が必要とされているのかというニーズ把握が大事なのだと思う。すべてのニーズに社協が対応できるわけではないかもしれないが、情報が届いていないから出てきているニーズもあるかもしれない。子どものことを考えると、その親をどう巻き込めるかがポイントだろう。また、コロナがない前提での計画ではなく、ウィズコロナの視点で計画をつくる必要がある。

委員長 次世代がいきいきと過ごしていけるとよい。
本日の場では、十分意見をいただくことはできなかったが、意見集約票で新たなご意見をいただきたい。

7. その他

(1) 意見集約票について

資料7

★事務局より資料7について説明

委員長 書くことが大変な方は、直接事務局に伝えていただきたい。

(2) その他

★事務局より事務連絡

- ・委員報酬については、前回同様、1か月以内の振込とし、通知はしないので確認をお願いしたい。
- ・次回委員会は2月28日(月)9時30分から予定している。

8. 閉会

社会福祉協議会事務局長より